



大阪+知的障害+地域+おもろい=創造

## 知の知の知の知

社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所情報誌通算 2914 号 2016.3.14 発行

### 認知症薬の副作用 100 件 興奮など、中間集計結果 共同通信 2016年3月13日



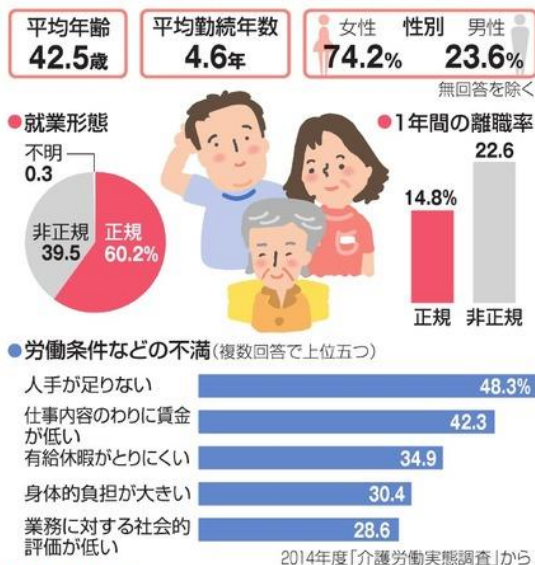
認知症治療研究会で発表する「抗認知症薬の適量処方を実現する会」代表の長尾和宏医師＝13日、横浜市西区 高齢者医療に取り組む医師らでつくる認知症治療研究会が13日、横浜市で開かれ、「抗認知症薬の適量処方を実現する会」（兵庫県）の代表、長尾和宏医師が、抗認知症薬の副作用とみられる興奮などの症例が約100件集まったとの中間集計結果を発表した。

長尾氏は「多くの医師や家族は、興奮や怒りっぽくなるといった症状を薬の副作用だと思っていない。症例を千件集め、厚生労働省に薬の適量使用を提言したい」と話した。8月、東京都内で集計結果の報告会を開く。

### 介護施設職員に感謝の言葉を伝えよう

朝日新聞 2016年3月14日

#### 介護施設で働く職員の「横顔」



#### ポイント

- 介護職員はなり手が減って夜勤などの勤務が厳しくなり、ストレスがたまりがちな実情がある
- できれば月に1回は入居者に面会に行き、職員の名前を覚えて感謝の気持ちを言葉で伝える
- 老人ホームの運営懇談会にはなるべく出席し、遠慮せずに発言する

グラフィック・西森万希子

川崎市で有料老人ホームの入居者3人が転落死する事件が起きるなど、介護現場での虐待が問題になっています。母親が最近、老人ホームに入居したのですが、大切にもらえるかどうか心配です。

親を有料老人ホームに入れると、任せきりにして面会に行かない家族がいます。仕事の都合などでなかなか訪問できない家族も多いようですが、できれば月に1回は面会に行きたいところです。

面会に行ったら、担当職員にあいさつをして、名前を覚えます。そして、「〇〇さんには、母（父）がいつも感謝しています。ありがとうございます」などと、感謝の気持ちを伝えましょう。

老人ホームは365日、24時間体制で高齢者をみています。多くは早番、日勤、遅番、夜勤（当直）の4交代です。たくさんの職員が面倒をみってくれるので顔と名前を覚えるのは大変ですが、できるだけ言葉で気持ちを伝えるようにするといいでしょう。

介護職員はいま、重労働の割に収入が少ない仕事とみられ、なり手が減っています。認

知症の入居者が増えて、ただでさえ気が抜けないのに、職員が少ないと夜勤の回数も多くなり、ストレスがたまります。人を助ける仕事は相手に感謝されることもやりがいですが、最近の老人ホームは介護で忙しいだけでなく、引き継ぎなどで書く書類も増え、入居者と向き合う時間がさらに減っています。このため、家族からの感謝の言葉は、我々が考える以上にうれしいそうです。

家族の訪問は、職員が入居者と話をするきっかけにもなります。認知症の人は、何もかも分からなくなっているわけではありません。家族が来たことは忘れても、職員が家族のことを話すと、自分が大切にされていると感じることができます。

介護福祉士などの資格を取り、介護について学んだ職員は、声かけの大切さを知っていますが、最近是人手不足で、あまり介護の勉強をしていないパートや派遣の職員も増えていきます。黙って認知症の人を介護をしているうちに、ものを扱うような気持ちになってしまうケースもあります。介護をしながら話すことがあれば、応対も自然に優しくなるはずですよ。

それから、年に1回は開かれる老人ホームの運営懇談会にはできるだけ出席して、発言しましょう。私も入居者の家族から頼まれて出ることがありますが、出席者は毎回同じ顔ぶれのことが多いうえ、発言するのはそのうちの一握りです。

### 路線バス内で女性の首絞める 殺人未遂の現行犯で男を逮捕

産経新聞 2016年3月13日

路線バス内で乗客の女性（81）の首を絞めたとして、大阪府警八尾署は13日、殺人未遂の現行犯で、大阪府八尾市山本町北の作業員の男（50）を逮捕した。男と女性に面識はなく、「精神的に疲れていて、気持ちを落ち着かせたかった」と容疑を認めている。男は市内の知的障害者の作業所から1人で帰る途中だったとみられる。逮捕容疑は13日午前9時45分ごろ、同市山本町を走行中の路線バス内で、前の座席に座っていた無職女性（81）の首を後ろから手で絞めたとしている。女性は頸（けい）椎（つい）捻挫の軽傷。当時車内には7～8人の乗客がいて、犯行に気づいた他の乗客が男を取り押さえたという。

### 無事告げる黄色ハンカチ 普及目指し400枚掲示 愛媛新聞 2016年03月13日

小野川沿いに掲げられたメッセージ入りの黄色いハンカチ



「黄色いハンカチ」を使って災害時の効率的な安否確認に役立てようと、愛媛県松山市の星岡地区で12日、住民がメッセージなどを記したハンカチ約400枚を小野川沿いに掲げ、取り組みをPRした。

地区の有志約40人でつくる星岡おやじの会（大原洋一代表）が「笑顔を運ぶ黄色いハンカチプロジェクト」と題して初めて取り組んだ。東日本大震災の被災地で、黄色いハンカチを玄関先に掲げて無事を示した町内会では安否確認が迅速だった例に倣い、災害に備えようと企画した。

あらかじめ地区の幼稚園児や民生委員にハンカチを配布。被災地へのメッセージや将来の夢などを記入してもらい、星岡3丁目の星岡橋から山崎橋にかけての約150メートルに掲げた。

ハンカチは4月3日まで掲示する予定。13日に星岡町内会である災害時要援護者避難支援訓練で、プロジェクトの趣旨を説明し、周知を図るといふ。

【今井絵理子単独インタビュー】「障害児が日本に生まれてよかったと思う国にしたい」「交

際男性の過去は気にせず支えたい」 産経新聞 2016年3月14日  
自民党から参院選に出馬表明した、今井絵理子氏（歌手）インタビュー＝7日、  
東京・永田町（古厩正樹撮影）

夏の参院選に自民党比例代表候補として出馬するダンスボーカルグループ「SPEED」の今井絵理子氏（32）が産経新聞のインタビューに答え、耳に障害をもつ長男のことや、一部週刊誌が報じた交際男性のことなどに触れ、「今後を見つめ、支えていくのが、私の生き方」と強調し、目指す政治活動のテーマに「一緒」を掲げた。主なやりとりは以下の通り。



――出馬の動機は

「11歳からずっと歌の世界にいて、歌しか分からない生活でしたが、21歳で息子を産み、障害という壁にあたりました。そこでやっと社会を学ぶ経験を重ね、障害者に対する偏見や差別などを少しずつ改善していけたらと思いました。息子と同じような障害児が大人になったとき『日本に生まれてよかった』と思う国にしたい。そう思って決意しました」

「今は大学に進む聴覚障害者が増えましたが、聴覚障害の大学生に手話通訳を付ける予算はありません。同じ学生のボランティアが隣に座り、ノートテークをして授業内容を説明しますが、ボランティアが授業を理解できる情報量にも限界があります。こうした『情報保障』を平等にすることにも取り組みたいと思っています」

――どんなときに障害者への偏見を感じたか

「私にも障害者への偏見はありました。なぜなら分からないから。小さい時に身近にいないので、大きくなったときにどう接したらいいか分からない。これが差別や偏見につながります。コミュニケーションの手段が分からないがために、壁を作ってしまう傾向があります」

「ではどう改善するか。息子が3歳のとき、保育園に1年間だけ入所したのですが、3歳児は障害の有無に関係なく遊んでくれました。その保育園には聴覚障害児の専門的な先生がいて、子供たちにこう教えてくれました。『礼夢君は耳が聞こえないから、こうやって対応するんだよ。遠くから礼夢君と呼んでも聞こえないから、肩をトントンとするんだよ』と。3歳児は素直なので『分かった』とすぐコミュニケーションが生まれます。ドイツでは、小さな頃から障害を持っている子と健常児がなるべく同じ環境で一緒に勉強していて、世論調査では、9割の人たちが障害への偏見がないという統計もあるそうです。日本では、その割合が逆だと思いませんか。それは触れているか、いないかの違いです」

――小さな頃から、そうした教育環境を作ることが大切だと

「今の日本の障害者対策は、どうしても『分ける』傾向が目立ちます。学校も普通学級、なかよし学級、ろう学校、特別支援学校と分けていますよね。障害児に専門的なことを教えられるメリットもありますが、大きくなったときどう社会に対応するのか、親に不安も残ります。逆に普通の学校の子たちは障害児を知らないまま育ち、そこで両者に壁ができる。こういうことを一つ一つ改善したいのです」

「だから、私の掲げるテーマは『一緒』。障害児と健常児と一緒に学んだり、交流したりできる場所を作りたい。（健常児の）親御さんも一緒に考え、学び合う場所も作りたい。例えば、交流の場で目の不自由な子がいることを知り、点字も体験してもらおう。そうすれば、『障害は個性』ということを知ってもらえると思うんですよね」

――息子さんは出馬をどう受け止めたか

「実は今（取材当日）、彼は選挙に臨んでいるんですよ。学校の児童会の選挙に『書記』候補として出馬しました。みんな手を挙げないようで、私の影響からか、立候補したと聞きました。今日は演説をやるのだそうです。息子は相変わらず、母として接してくれています。出馬にあたっては『手話を沢山のの人に認めてもらいたい』と語ってくれました。手話を交えた私の出馬会見がテレビ放映され、息子の友達もすごく喜んでくれました。私の

話をすぐ理解してもらえますのでから」

—これまで政治家にはどんなイメージがあったか

「いやあ、どうなのでしょうね。うーん…正直怖いというイメージがありました。ただ、政治家の皆さんのおかげで今の安全な国が作られているとも感じています。女性議員はもう少し増えてほしい。スウェーデンは全国会議員に占める割合が40%と聞きました。子育て政策の立案には『母性』の要素を考えることも大切です。女性議員がたくさん出てくることによって、そういった面もケアできるのではないかな」

「私は若い人たちと国の間をつなげる役割も担いたいと思います。政治は難しいとか、怖い人がたくさんいるという声を多く聞くので。若い人を国会の本会議や委員会質疑の傍聴席に招き、真剣に議論している様子にも触れてほしい。私たちの世代は、国会を傍聴できることすら知らない人が多いのではないのでしょうか」

—自民党の谷垣禎一幹事長は「SPEEDって何」と話していた

「なので、CDを渡しました。谷垣幹事長は『聞いて勉強します』と答えてくださいました」

—SPEEDの活動はこれからどうなるのか

「今年デビュー20周年を迎えるので、ファンの皆様に何かしらやりたいと思ってます。ただ私は器用ではありません。(政治家として)知らなければならぬことがたくさんあるので、まずは政治第一。SPEEDの活動は、そうした合間をぬってできたら理想的です」

—メンバーの反応は

「『信じられない』って言っています。出馬会見の様子もチェックしてくれていて『緊張していた』とも言われました。やはり仲間には分かるものですね。メンバーも政治を知ろうとしてくれていて、そういう気持ちはすごくうれしいです」

—出身地の沖縄への思いは

「生まれ育った街で、幼いときから米軍基地が身近にありました。私の中では当たり前光景です。やはり沖縄の皆さんの声を聞けば、基地負担は軽減させた方がいい。そういう取り組みにも参加していきます。自分で改めて現地を見て、声を聞きたいです。自分で見て体験しないと納得できない性格なので」

—昨年成立した安全保障関連法に絡んだツイッターが話題になった

「私は戦争に反対という意味であり、安保法に反対と言ったものではありません。私のおじい、おばあも含め、ひめゆりの塔などに行くと、戦争の悲惨なことを涙ながらに伺います。戦争はやってはならない。ただ、戦争をしないために黙っていればいいというわけではありません。備えは必要です。それが戦争に直接つながるとするのは違う」

—沖縄は経済問題が深刻だ

「若者の貧困がすごく目立っていて、私の同級生も出稼ぎに愛知県に行っています。私は以前、沖縄の児童養護施設にも行きましたが、沖縄は子供の貧困も目立ちます。ネグレクトも多いんですよ。現場に足を運び、どう改善すればいいのか、いろいろ話を聞きたい」

—週刊誌が、過去に逮捕歴のある男性との交際を報じた

「あることないこと書かれています。私は彼の過去に関しては気にしていませんし、彼に関してはこれから先がとても大事だと思っています。彼も幼少期、ネグレクトを受けて育った1人です。過去に悪いこと…悪いことというか、人を傷つけたり、法に触れたりすることをした人が、ずっとそういうレッテルを貼られて生きていかなければいけないのでしょうか。更生してきちんと生きていってもいいんじゃないのでしょうか。今後を見つめ、見守って支えていってあげるのが、私の生き方です」

—男性を今後も支えていくのか

「そうですね。私のテーマが『一緒』なので。一緒に歩いていけたらいいと思います」

—息子さんにとっては父親のような存在か

「はい。彼は手話で意思疎通もできます。ちゃんと歩み寄ってくれています。日本では、一回そういう(悪い)ことがあると抜け出そうにもチャンスがない。社会全体が一度レッ

テルをはったら、ずっとそのまま生きていかざるを得ない傾向があり、誰も手を差し伸べない。私は手を差し伸べたい。それで『一緒に頑張ろう』と言いたいのです」

(聞き手 水内茂幸、豊田真由美)

#### 社説：保育施設の拡充 現実と向き合う姿勢を 北海道新聞 2016年3月14日

「保育園落ちた日本死ね!!!」と、わが子が保育園の入園審査に落ちた不満をつづった匿名女性のブログが波紋を広げている。

子どもを産んでも預け先がなく、仕事を辞めざるを得ない。

女性の切実な訴えを機に、保育制度の充実を求める署名が6日間で2万8千人分も集まった。子育て世代の不満が、政府が考える以上に高まっている証左だろう。

国会で質問を受けた安倍晋三首相が「匿名である以上、本当かどうか確かめようがない」などと答弁したことも反発を招いている。

政府は「1億総活躍社会」を掲げ、重要課題に「待機児童ゼロ」を唱えている。ならば、子育ての現実と向き合うことが不可欠だ。

親たちの声に耳を傾け、保育施設の拡充に努める必要がある。

保育所など、保育の受け皿の定員は毎年増え、過去最多を更新し続けている。

厚生労働省によると、昨年4月の定員は前年より14万人近く多い247万人となった。ところが待機児童も1800人増の約2万3千人と5年ぶりに増えた。2万人超えは7年連続だ。

社会参加に意欲的な子育て世代の女性が増えているのだろう。潜在的な需要はさらにあると受け止めるべきだ。

首相は1月の施政方針演説で、2017年度末までに50万人分の保育の受け皿整備を明言。さらに今回の問題を受け「地域と連携しながら早急に取り組みたい」と追加対策を講じる方針を示した。

もちろん、数の確保だけでは十分とは言えない。

政府は待機児童対策解消のお手本として、横浜市の取り組みに言及することが多い。10年に待機児童が1500人超で全国ワーストだったが、企業参入などを進め3年でゼロにしたからだ。

ただ、園庭のないビル内の保育所が増え、詰め込み保育の問題も指摘されている。

保育の質も確保しなければ、母親らは安心して子どもを預けられない。保育士の養成にも力を入れるべきだ。

保育の充実とともに、子育て世代を社会全体で支える仕組みづくりも整えていきたい。

男女を問わず、子どもと接する時間を増やせるよう、働き方を見直すことも必要だ。企業にも積極的な取り組みを求められる。

子育ては日本の将来を考える上で重要な課題だ。与野党には単に政争の具にするのではなく、建設的な議論を望みたい。

#### 社説[子どもシェルター]独りぼっちじゃないよ 沖縄タイムス 2016年3月13日

親の虐待から逃れるため家を飛び出した子、少年院を出ても帰る場所のない子、家にいるのが嫌で夜の街をさまよう子…。そんな子どもたちの緊急避難場所として、NPO法人が運営する「子どもシェルターおきなわ」が4月に開所する。制度のはざまに陥りやすい10代後半の子どもたちを対象に、支援の穴を埋めようとする取り組みである。

沖縄弁護士会の弁護士らが中心となり設立準備を進めてきた。さまざまな理由から「今夜寝る場所がない」という危険な状況にある子に接し、受け皿づくりの必要性を感じていたからだ。

シェルターおきなわは、逃げ場が少なく性被害を受ける恐れがある少女を対象に、定員

6人でスタート。常駐するスタッフのほか、医療や福祉、心理の専門家などが連携して支援にあたる。一人一人に弁護士が付き、親権者との交渉も担う。

虐待などで家庭で暮らすことができない子どもを保護する施設には児童相談所の一時保護所があるが、児童福祉法の対象から外れる18歳以上は入所できない。性的虐待など深い傷を抱える子は、施設での集団生活になじめないケースも多い。

頼れる家族がないといった養育環境の問題は、深夜徘徊（はいかい）が多いなど沖縄の深刻な少年非行の背景としても指摘される。

家庭で養育される権利を奪われ、制度のはざままで苦しむ子どもたちを救うシェルターの活動に期待する。こどもシェルターは2004年に東京で設立された「カリヨン子どもセンター」を皮切りに、沖縄で14カ所目。

運営資金は公的支援や寄付でまかなっているが、現在3カ所の施設が休止に追い込まれるなど安定的財源の確保が課題となっている。

今月6日、那覇市内で開かれた「子どもシェルターおきなわ設立記念シンポジウム」で講演したカリヨン子どもセンターの坪井節子理事長は、「独りぼっちじゃないんだよ」と伝えることの大切さと、「いつも子どもを真ん中において、関係する機関でスクラムを組んで対応する」重要性について語った。

カリヨンではシェルターで2カ月ほど過ごした後、家に戻れた子は5人に1人という。そのため就労し自立を目指す自立援助ホームを次の居場所として整備した。

沖縄でもシェルター退所後の見守りや支援機関との連携は待ったなしとなる。

4月からスタートする県子どもの貧困対策推進計画の素案には「安全・安心な子どもの居場所の確保」が記されている。子どもたちに温かい食事とほっとできる場所を用意する民間の「子ども食堂」の取り組みは急速に広がっている。

夜1人で過ごす子に居場所を提供し、ボランティアが勉強をみたり、話し相手となる「トワイライトステイ」の必要性も認識されつつある。支援のとりこぼしをなくすためにも、地域で子どもたちを支える場がもっと増えてほしい。

## 社説：【広島中3自殺】学校での冤罪を究明せよ 高知新聞 2016年03月13日

広島県府中町にある公立中学校の3年男子生徒が昨年末、自ら命を絶った。身に覚えのない2年以上前の万引記録に基づいた進路指導を苦にしたとみられる。

学校側による報告書の内容では、圧倒的に優位な立場で生徒を追い込んだ「冤罪（えんざい）」事件というほかあるまい。「学校としての責任がある」と結論付けたが、原因に思い込みやミス連鎖を挙げ、責任の所在を曖昧にした印象が拭えない。

命を守るべき学校が原因でなぜ、信じがたい悲劇が起こったのか。町教委が設置する第三者委員会の調査で、早急に客観的な経緯を明らかにする必要がある。

一般的に学校現場の多忙さが指摘されるものの、報告書からはそれとは異質な、ずさん極まりないありようが浮かび上がる。

生徒は公立高校が第1志望、受験に校長の推薦が必要な私立高校を第2志望にしていた。高校入試の制度は各都道府県で違うが、この中学校は推薦の基準とする非行歴の調査対象を、従来の3年時から「1～3年時」に変更していた。

このため、別の生徒による万引の誤った記録を問題視し、担任教諭が5回にわたる進路指導を通じ、「推薦できない」と伝えていた。本来は担任が詳細を確認すべきだったが、生徒が明確に否定しなかったことから「確信」したという。

生徒はその後の三者面談に姿を見せず、自宅で自殺した。

驚きを禁じ得ないのは、子どもの将来を左右しかねない進路指導が教室前の廊下で立ち話で行われ、いずれも5分程度だったことだ。とても生徒の人生に携わる緊張感はうかがえない。ただでさえ受験を前に不安を抱えた時期である。冤罪のショックは計り知れない。ましてや周囲に別の生徒の目があるなか、とっさに否定できなくても不思議はあるまい。

生前、生徒は家族に「担任に言っても聞いてくれないクラスの雰囲気がある」と話していたという。この言葉が、学校の実情を象徴していよう。不信はあまりに深かった。

事実とは異なるが、仮に生徒が以前に過ちを犯したとして、現在の評価と直結させる手法はいかなものか。多感な時期である。悔い改め、反省を糧に著しく成長している可能性は十分にある。

しかし、この学校では生徒の日常の姿より、間違っただけのデータを重視した。

ずいぶん前の「過ち」を許さず、画一的な基準で生徒の選択肢を奪う。この懲罰主義で人を育て導くことなどできようか。その結果が悲劇につながったことを重く受け止めるべきだ。児童や生徒の間では進路指導ばかりでなく、いじめなどで自ら命を絶つケースが後を絶たない。死に至らなくとも苦しみを抱えた子どもも多い。一人一人の生徒に向き合う自覚を広く確認するためにも、真相の究明を急がなければならない。

### 社説 広島中3自殺 「なぜ」の徹底的検証を 毎日新聞 2016年3月14日

広島県府中町で昨年12月、中学3年の男子生徒が自殺した。学校側は進路指導が原因と見られると説明しているが不明確なことが多い。男子生徒はなぜ自殺に追い込まれたのか。疑問を払拭（ふっしょく）するための調査を尽くすべきだ。

学校側の報告書によると、男子生徒が1年生の時、生徒指導の会議資料に万引きをした別の生徒と間違っただけで男子生徒の名前が記載されてしまった。会議で誤記載に気付いたが、学校の電子データには誤ったままの記録が保管されていた。担任教諭は誤記載のままの記録に基づき、万引き行為のために志望校への推薦はできないと伝えた。男子生徒は面談の直後に自宅で自殺した。

学校の情報管理はあまりにずさんだった。生徒の万引き行為の報告を全て口頭で済まし、パソコン入力で名前を間違えていた。資料の修正や閲覧の仕方は、各教員の裁量に任されていた。非行行為の記録という重要な個人情報取り扱いについての検証が求められる。

各教員が進路指導に当たる直前の昨年11月に、校長は私立高校への推薦基準を見直して非行歴の調査対象を3年生時のみから1年生以降に変更した。担任教諭は10日間ほど非行歴を確認するよう求められ、当時の担任や保護者にまでは確認しなかった。進路の選択に重大な影響を与える変更をなぜ入試直前に強行したのか。解明が必要だ。

万引きを生徒本人に確認するため担任教諭は計5回面談したが、いずれも廊下で5～15分程度の立ち話で済ませた。男子生徒は進路指導をめぐるやり取りで「どうせ言っても先生は聞いてくれない」と保護者に打ち明けていたという。教師と生徒の信頼関係ができていたのだろうか。疑問が残る。

中学校学習指導要領では指導計画の作成に当たって配慮すべきこととして「生徒のよい点や進歩の状況などを積極的に評価し、指導の過程や成果を評価する」としている。できるだけ生徒の良い点を見つけ、良くない点が改善していった過程を重要視しようという考え方だ。現場での進路指導がデータに頼った形式的なものになっていないか、今一度チェックする必要がある。

学校がまとめた報告書に対し両親は「他の生徒たちにも話を聞く必要がある」と指摘している。保護者への説明会では批判や質問が噴出した。学校は保護者や生徒たちの「なぜ」に誠実に答えなければならない。

町教委は第三者委員会を設けて調査に入る。文部科学省は緊急の対策チームを設置した。二度と悲劇を繰り返さないため、不明確な点を徹底的に検証する必要がある。

### 【主張】災害弱者 少子高齢化への対応急げ 産経新聞 2016年3月14日

少子高齢化や人口の減少にあわせて意識を変えなければ、今後の災害への対応はできなくなるだろう。政府や自治体は早急に人口動態を織り込んだ実効性のある政策を練り上げ

てほしい。

東日本大震災では高齢者ら「災害弱者」の避難を手伝って津波被害に遭った人もいる。災害弱者をどう社会で守るか。これは大きな課題である。

高齢化が本格化するのはいずれからか。国の推計では15年後には75歳以上が全体の2割を占める。1人で動けない災害弱者の増大にも通じる。人口が激減する地域では見守りの目も弱まる。

政府は災害対策基本法を改正し、自力避難が困難な高齢者や障害者を「避難行動要支援者」と位置付けている。自治体に要支援者名簿や個別の避難計画の作成を求めたが、支援者の確保は思うように進んでいない。地域内で災害弱者の情報を共有し、住民の役割分担を明確にしておくことが欠かせない。緊急時の対策は平時に万全を図らなくてはならない。

高齢者同士で助け合う場面も増えるだろう。若者に比べて避難に時間がかかるため、迅速に災害情報を提供し、早め早めの行動を促すことが重要となる。各自治体には、高齢者の視点に立って避難計画や災害対策の点検を徹底するよう求める。

加えて深刻なのは、少子化に伴い、災害時に救助にあたる自衛官や警察官、海上保安官、消防官といった若い力の確保が、年々困難さを増すことだ。

自衛隊の募集対象である18～26歳の人口は平成6年度の1700万人が26年度には1100万人に減少した。防衛白書は「自衛官の募集環境は、ますます厳しくなることが予想される」と危機感を募らせている。東日本大震災時に自衛隊は、最大時10万7000人の自衛官を被災地に投入し、多くの被災者を救った。

総員約23万人のうち半数近くが震災対応に従事したのだから、国防は手薄になる。現実には震災後には、中露の軍が非常時下の日本の防衛力を試すような挑発行為に出て、自衛隊が「二正面対応」を迫られる場面もあった。

警察や消防なども合わせ、欠かせない人員の確保にどう知恵を絞るか。少子高齢化を余儀なくされる新たな時代の、極めて重要な災害対策である。

## 余録 人が大人になるにはいくつもの分かれ道を選びながら進んでいく…

毎日新聞 2016年3月13日

人が大人になるにはいくつもの分かれ道を選びながら進んでいく。子どものころは見えなかった道、聞こえなかった声、それらを自ら吟味して選択を重ねる。15歳は大人への選択の旅の始まりだ▲中学からの高校受験と進学、就職はその初めての選択だろう。親や養育者の保護のもとで暮らしてきた少年少女はそこでじかに社会と向かい合い、自らの力でそれと渡り合う。中学校での進路指導はその少年少女たちの選択を支援し、勇気づける仕組みのはずである▲だが広島県府中町立府中緑ヶ丘中3年の男子生徒は、その進路指導によって歩もうとした道をふさがれた。何とその指導に用いられた生徒の資料にはありもしない非行歴が誤って記録されていたのである。あろうことか生徒は進路指導の後に自ら命を絶ってしまった▲学校の調査によれば記録の誤りは認識されていたのに、パソコンの元データが放置されていたから天を仰ぐしかない。担任の教師は廊下での立ち話で非行記録のため志望校への推薦ができないことを生徒に告げたが、生徒はいったいどんな気持ちでそれを聞いたのか▲生徒が初めて向かい合った「社会」が身に覚えのない非行記録、理不尽（りふじん）な進路指導、画一的な推薦制度だったのならば絶望の深さは察するに余りある。ただ悲しく残念なのは、これから未来へと枝分かれしていくすべての道を生徒自らが断ち切ってしまったことである▲大人への道に立ちふさがる迷路や袋小路には愚かしい過失や怠慢によってもたらされたものもある。そこで苦しむ少年少女はどうか声をあげてほしい。声を聞きつける元少年少女は必ずいるはずだ。



月刊情報誌「太陽の子」、隔月本人新聞「青空新聞」、社内誌「つなぐちゃんベクトル」、ネット情報「たまにブログ」も  
大阪市天王寺区生玉前町5-33 社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所発行